

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	I-Ting Huai-Ching Liu
論文題目	Fitting In or Standing Out: Challenges Experienced by Students, Freeters, and Individuals with Diabetes Mellitus in Japan's Interdependent Society (馴染むか浮くか:日本の相互協調社会において、学生・フリーター・糖尿病を持つ人が直面する課題)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、社会的な適合性の個人差を、文化的価値観の視点から検討したものである。</p> <p>北米や西欧・北欧の文化は相互独立的な自己観をもち、個人の自立を重視する。一方、アジア、中・南米、アフリカの文化は相互協調的な自己観をもち、社会全体の調和を重視する。この中で日本は特に同調性に基づく文化を持つとされ、社会的欲求を満たすためには、社会の期待に応えることが必要であるとされている。しかし、社会的な適合性の程度には個人差があり、適合性が低い場合、社会的な疎外感を感じやすく、これが幸福感にも影響を及ぼすことが知られている。本研究は、日本の文化が重視する相互協調性に対して適合が困難となるような状況について、一連の研究と考察を行ったものである。</p> <p>本論文で注目された疎外要因は2つある。1つ目は経済的な困難によるもので、例えば新卒者が就職しにくい状況である。2つ目は個人的な状況で、特定の慢性的な健康問題を抱えていることである。</p> <p>本論文は序論である第1章と、具体的な研究である第2章から第4章、総合考察である第5章からなる。第1章では、日本における相互協調性について述べられた後、個人と文化的価値観の適合性について論じられ、個人差について考察された。その例として、ひきこもりの事例が取り上げられ、これまでの研究について概観された。</p> <p>第2章の研究1では、フリーターや学生が社会的疎外リスクに直面した際の同調志向を調査した。オンライン調査において、大学生とフリーターをランダムに2種類のプライミング条件(疎外リスク、非疎外リスク)に割り当て、NEET-ひきこもりリスク(NHR)尺度および集団内メンバーへの同調、自己一貫性を維持するための同調志向を測定した。その結果、学生においては疎外リスクのプライミングが自己一貫性を維持する傾向を低下させる一方で、集団内のメンバーへの同調志向を低下させることはなかった。フリーターにおいては、疎外リスクのプライミングが集団内のメンバーへの同調志向を高めた。これらの結果は、総じて、経済的な状況により文化的</p>			

目標達成の困難さが生じることが想起される場合においても、日本のフリーターや学生は文化的規範を維持しようとする傾向を示すものであった。

第3章の研究2では、持続的な慢性疾患である、糖尿病患者をターゲットに、健康と幸福感に影響を及ぼす心理社会的要因を調査することを目的とした。日本の糖尿病患者を対象に横断的調査を行い、独立のおよび相互協調的な自己概念、感じられる感情的サポート、および幸福感（協調的幸福）を評価した。血糖値に関するHbA1cデータは、内分泌科医を通じて最近の健康記録から得た。これらの変数間の関連を調査するために、相関分析と構造方程式モデリングを実施した。結果として、患者の幸福感は相互独立的自己観ならびに知覚された情緒的サポートとの間に正の相関を示し、HbA1cレベルとは負の相関を示した。一方、相互協調的自己観とは関連が認められなかった。この結果は、日本の糖尿病患者にとって、日本社会において優勢とはされていないような、相互独立性が心理的な幸福感と健康結果に関連していることを示しており、慢性疾患を抱える患者がもつ文化的自己観の働きの特徴を見出した。

第4章の研究3では、糖尿病を抱える若者へのインタビューを行い、その健康状態の開示や家族の反応など、病状管理に関連する様々な要素を探求した。患者中心のインタビューの重要性を強調した過去の研究に基づき、質的インタビューを用いたボトムアップのアプローチを実施した。動機づけのパターン、自己開示、家族の反応、HbA1cとの関連性を調査した結果、自己開示の傾向はHbA1cの低さと関連していた。動機づけのパターンはHbA1cとは関連しなかったが、積極的に疾患と向き合うような動機づけはSNSなどの自助グループへの参加意欲と関連していた。

第5章の総合考察ではこれらの知見を総合して、日本社会が多様性を受け入れ、ステイグマと偏見を取り除くことで、社会的に周辺化する可能性がある人々を支援する必要性を論じた。また、研究結果の社会的なインプリケーションと今後の課題についても論じられた。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、社会生活における適合性や幸福感の個人差を、文化的価値観の視点から検討したものである。特に、文化比較の文脈においては、文化の主流である心理・行動傾向の比較が多く行われている中、周辺化されている人々の心理傾向や動機づけについての研究はまだ十分とはいえない。本論文では、こうした問題に対して、経済社会的要因からの検討と、慢性疾患がもたらす状況要因からの検討を組み合わせ、シナリオを用いた実験的な調査と糖尿病外来患者を対象とした質問紙調査、質的インタビューを実施して、学際的かつ実証的にアプローチしようとした。本学位申請論文は、意欲的かつ、きわめてユニークで、意義のあるものとなっている。

この一連の研究からは以下の点が明らかにされた。

第1章で社会疎外要因について概観された後、第2章では、社会的疎外リスク（就業困難）に直面した際の心理的反応について、フリーターと学生を対象に調査した。ランダムに2種類のプライミング条件（疎外リスク、非疎外リスク）に割り当てた後、リスク状態についての認識課題と、集団内のメンバーへの同調や自己一貫性傾向を測定した。その結果、経済的な困難により、文化的な目標達成が難しいことが想起される状況においても、日本のフリーターや学生は集団主義的な文化的規範を維持しようとする傾向が示された。この結果は、経済社会的な状況が文化的逸脱をもたらす可能性があると言われてきたなか、むしろ日本の学生やフリーターは逸脱することなく、文化への再統合をしようとする可能性があるという、興味深い知見を提供している。

次に、第3章では、持続的な慢性疾患である糖尿病患者を対象に、健康と幸福感に影響を及ぼす心理社会的要因を検討した。病院の外来に通院する患者180名からの質問紙回答データと、患者の血糖値に関するHbA1cデータとが紐付けて分析された。その結果、患者の幸福感は相互独立的自己観や知覚された情緒的支持と正の相関を示し、HbA1cレベルとは負の相関を示した。一方で、相互協調的自己観とは関連が見られなかった。これは、日本の糖尿病患者にとって、社会的に優勢とされている相互協調性よりも、相互独立性が心理的な幸福感と健康に関連しているという、貴重な知見を示すものである。

さらに、第4章では、同じく病院の外来に通院する比較的若年層の糖尿病患者24名を対象としたインタビューを行い、自分の疾患についての他者への開示や家族の反応など、病状管理に関連する要素について検討を行った。動機づけのパターン、自己開示、家族の反応、HbA1cとの関連性について内容分析を行ったところ、自己開示の傾向はHbA1cの低さと関連していることが示された。動機づけのパターンはHbA1cとの関連は見られなかったが、積極的に疾患と向き合うような動機づけはSNSにおける自助グループへの参加意欲と関連していた。

第5章では、日本社会が多様性を受け入れ、スティグマと偏見を取り除くことで、社会

的に周辺化する可能性がある人々を支援する必要性が論じられた。

以上の結果から、本論文で示された一連の研究は、実験的研究、質問紙調査、質的調査などの様々な手法を用いており、さらには社会経済的状况ならびに慢性疾患という異なる要素における社会疎外要因というコンテキストから、心理的な幸福感や動機づけについて解明しようとする意欲的なものである。したがって、当該分野における新たな発展を予期させ、また、新しい学術の創出につながる可能性がある研究として、高く評価できる。特に社会的な周辺化は多様なウェルビーイングを目指す今後の日本社会においても重要な課題であり、本研究の結果が将来的な社会的包摂に貢献する可能性も高く、社会実装的な視点を提示しているという観点においても、高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年6月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降